仏舎利塔33周年法要お花まつり

お釈迦様に学び平和な世界を

日本山妙法寺福岡久山道場

桜の花びらが舞い、幟たなびく花まつり法要＝4月7日、福岡市久山町

4月7日、福岡県久山町にある本山妙法寺久山道場（今中妙信住職）の仏舎利塔前で「お花まつり」と仏舎利塔建立33周年大法要が厳修された。

町議会議員ら来賓の臨席のもと、およそ100人の信徒らが参加する中、導師の吉田行典上人（熊本県花岡山道場住職）が10人の式衆を伴い入場。開経偈、妙法蓮華経を唱え、読経が続いた。その後、来賓、参詣者が順に焼香し、花御堂で甘茶を潅仏。

吉田上人は法話の中で次のように述べた。

「桜の花びらが吹雪の如く、舞いながら皆様の上に招魂してくださった。お釈迦様は仏でありながら、未法の世に人類が滅亡しかねない時に衆生を救済するためにわざわざ娑婆世界に誕生された。美しい花に囲まれてお生まれになったお釈迦様は、その生涯も教えも豊かなものだった。

お釈迦様の教えは、争いのない平和な生き方の法。仏様の前に佇むと皆様の心も和やかになり、豊かな気持ちになる。お釈迦様が絶対に怒らなかったように、私たちも怒りを鎮め、お釈迦様の御心に従って和やかに生きていきたいと思う。

今日皆様と祈ったのは『天下泰平国家安穏』。お釈迦様は亡くなられた後も、この世のどこにでも生きておられ法を説くと言われました。今は仏舎利塔が至るところに建てられ、法を説いておられる。

法話する吉田行典上人＝4月7日、福岡市久山町

今日も末法の世、貪欲の時代。貪欲は怒りを生じ、怨みを買い、争いを生む。貪欲は人をあさましくする。感謝を欠くと驕慢になり、嘘偽りも平気になる。しかし、我々は人間に生まれた以上、和やかに過ごさねばならない。人間は皆仏の子、兄弟であるから、助け合い思いやるのが本来の姿。お釈迦様は、殺してはならない、嘘をついてはいけない、物を盗ってはならないと説かれた。それを守り、徳を積んでいかなければならない。

3・11後も各地で災害は起こっている。これは何を意味するか。人間が人間の心を取り戻さなければ戦争の危険性がある。核戦争が起きると人間はこの地上に生きていけるだろうか。災害は天の戒めだと、心から信じなければならない。皆が仲良く、助け合い、思いやる心になれば、軍備拡張が要るだろうか。お釈迦様の教えが全人類に浸透したならばどこに戦争があるだろうか。お釈迦様が平和のために説かれた経文を唱えて、その教えを広めていきたい」

第二部は、地元の和太鼓チーム「ガイアの響」による勇猛な奉納太鼓。7名の少年少女らが「黒田節」など3曲の鼓動を響かせた。続いて中国からの帰国子女、王さんによるモンゴル舞踊。中国少数民族の音楽演奏などが続いた。

即位儀礼の内容と現代的課題についてのパネルディスカッション＝3月5日、東京・千代田区

国際神道セミナー「譲位儀礼と大嘗祭」

大嘗祭と政教分離など議論

東京・千代田区

神道国際学会（マイケル・パイ会長）が主催する第21回国際神道セミナー「譲位儀礼と大嘗祭」が3月5日、東京・千代田区の会場で開かれた。第一部では研究者3人が研究発表し、第二部ではモデレーターと4人のパネリストによりディスカッションと活発な質疑応答が繰り広げられた。

国際的な視野で探究

開会挨拶で神道国際学会の三宅善信理事長は、「今年は陛下の御代かわり。通常は崩御の悲しみを伴うが、今回は200年ぶりの譲位によるもので、めでたくもある。本セミナーは国際的な視野での探究なので、違う視点での気づきがあるかと思う」と述べた。

第一部の講演者は、皇學館大學研究開発推進センター神道研究所助教の佐野真人氏、横浜市立大学学術院国際総合科学群教授の松本郁代氏、神道国際学会会長のマイケル・パイ氏の3人。佐野助教は日本古代史・神道史が専門で、皇室祭祀や神宮祭祀を研究している。松本教授の専門は日本文化史、中世宗教思想で、即位儀礼の中でも特に即位灌頂を研究している。パイ会長は、日本、イギリス、ドイツの大学で宗教学の教鞭をとり、国際宗教史学会会長も務め、神道・仏教などの調査研究を続けている。

講演1は佐野助教による「大嘗祭における太上天皇の役割」で、太上天皇とは退位された天皇のこと。講演の要旨は次の通り。

「大嘗祭は秘儀と言われ、折口信夫らが天皇霊との一体化だと主張したような俗説が流布した。しかし、太上天皇による大嘗祭の秘儀について詳細な記録があるので、これらは皇學館大學の岡田荘司先生によって論破された。鎌倉時代の『建暦御記 大嘗会神饌秘記』は、順徳天皇の大嘗祭の前年、後鳥羽太上天皇が神饌の教訓を記している。『伏見院宸記』では、伏見天皇ご自身の大嘗祭における神饌御親供の作法について、詳細な記録を残されている。近世の仁孝天皇大嘗祭でも、光格太上天皇による神饌供進の作法教授を記した記録がある。

大嘗祭における秘儀とは、神饌や御親供の所作、御告文の内容などのことで、大嘗祭を行われた天皇にのみ受け継がれる事項として秘儀であり、その内容は余人が知りがたい。譲位によって皇位継承が行われた場合には、太上天皇が大嘗祭の経験者として秘儀内容を天皇に伝授することができるのが重要であろう」

講演2は、松本教授の「中世における即位儀礼と神仏」。松本教授は、「中世は神仏の理解がもっと自由になされていた」として、即位儀礼の中での神仏との接触を、「秘説」を表象する和歌や絵画から分析している。要旨は次のとおり。

「11世紀、後三条天皇が即位式で大日如来と一体となる作法を始め、13世紀には即位灌頂と呼ばれるようになった。古代インドに由来する即位灌頂は文字通り水を灌ぐものだが、日本では大日如来の印と明が修される。皇帝や天皇を仏に喩えることは仏教文化圏で古来より広くあった。

大日如来は太陽の光明、宇宙万物のすべて、永遠不滅の表象であり、アマテラスと同体と考えられ、大日如来が悟りを開き、開敷華王如来、宝幢如来、無量寿如来、天鼓雷音如来の四如来に灌仏し、自らは毘盧遮那如来と一体となる儀式を行う。

開会の挨拶をする三宅善信理事長

即位灌頂は、現世の仏としての天皇が理念的に君臨し、末法の時代に光を照らす存在として現世に即位することを示すものと言える。また、天皇は宇宙を照らす存在で、光の当たる範囲が支配領域である。

儀式書には書かれていないが、和歌の中に大嘗祭における神の姿、あるいは神話にかかわる記述がある。南北朝時代の皇統が複雑化した状況下で行われた即位儀礼は、それまでの形式化したものとは意味が違うと思われる。たとえば、『天地のひらけし時の薦牟や　神の七代のはじめなりけん』（法印定為）や『あまのとのあけし月日もはらぬは　神世ながらの光なりけり』（後醍醐天皇御製）は、天地開闢神話、天岩窟戸神話を想起させる。『あまのとのあけし』は大嘗祭にかかる和歌の中に多く登場する。

二つの神話に共通するのは、暗い状態から明るい状態、混沌としているところから神が誕生する場面が描かれている。大嘗祭の儀礼は悠紀殿と主基殿で行われるが、午後8時頃に内裏を出御し廻立殿を経て悠紀殿に入り、廻立殿を経て主基殿での儀へと移り、再び廻立殿に戻り、早朝に還御する。宵から暁にかけての時間帯は、民俗学的には生と死、死から生への時間とする考えがあるが、歌では神話的な時間を表しているのではないか。

即位灌頂は、大日如来、毘盧遮那如来、一字金輪如来など、光の尊格化した仏に天皇を同体化させる役割をもつ。天地開闢神話や天岩窟戸神話で詠まれている蘆牙、国常立尊、天之御中主神などの神は、天照大神と伊勢と天皇のつながりとして読め、暗いところから光を放つ光のエネルギーを備えた存在として天皇が解釈されたのではないか。

即位儀礼における神仏は光を当てる存在で、その射程や範囲が地上世界として示され、光の尊格を与えられた天皇が、光の神仏を祀る司祭者とされていたと考えられる」

問題にはならない

講演3は、パイ会長の「現代の即位の礼と大嘗祭の宗教的要素」

パイ会長は、第一に近代、現代における即位の礼と大嘗祭の根本的問題、第二に宗教の概念、第三に今上陛下の30年前の即位の礼と大嘗祭の思い出の三点に分けて論じた。

「戦前と戦後では即位の礼と大嘗祭には違いがある。戦前は、キリスト教から見ると天皇が『神』になることを心配していたが、戦後はその問題は弱くなった。一方、政教分離によって儀式と宗教性の関係が問題になり、何が宗教的、政治的であるかが、新たな問題として現れてきた。宗教は個人の信仰の在り方で、信仰の自由が言われるようになった。また、宗教法人となった宗教施設は国家から離れた存在となった。今回の譲位による新しい天皇の即位では、宗教的な動きであるかどうかが問われる。

30年前の即位式はよく考えられ、宗教と国家の区別を守ったとの印象がある。それは、即位の礼と大嘗祭を区別したからで、即位の礼は非宗教的、パブリックに行われ、大嘗祭は宗教的に、宮中でプライベートに行われ、儀礼は神道的だった。その区別は賢明で健全である。

宗教には個人的な信仰だけではなく多様な側面がある。日本人はよく『自分の宗教はない』と言うが、宗教法人にはならない多様な宗教現象がみられる。霊性的文化、原型的宗教、市民宗教がそれで、成人式は儀式的要素があり市民宗教と言える。即位の礼もこれに類して、憲法に規定する『個人の信仰』の意味での宗教ではなく『市民宗教』現象とみることができる。

即位の礼は、市民宗教という意味においてのみ宗教的といえるが、個人の信仰という観点では宗教的とは言えない。一方、大嘗祭は二つの意味で宗教的で、一つは市民宗教として、もう一つは、伊勢神宮とのつながりから。しかし、それはプライベートな側面が強く、部外者が参加するわけではないので、問題にはならない」

即位の礼は市民宗教

パネルディスカッションでは、麗澤大学外国語学部の岩澤智子教授がモデレーターとなり、神習教の芳村正徳教主と3人の講師に三つのテーマで投げかけた。それは、①即位儀礼とは、②「大嘗祭」と「政教分離」。

広義の即位儀礼とは、①践祚の儀、②即位の儀、③大嘗祭で、それぞれの内容を芳村教主が解説。

「狭義の即位は、天皇陛下が高御座にお座りになり、天皇になったと宣言し内外に知らしめる行為をいう。践祚とは、皇位の継承で、三種の神器を先帝から受け継ぐこと。大嘗祭は、神田で特別な形で収穫した米を天皇陛下自らが高祖天照大神に捧げ、それを頂いて高祖の力を頂くことだ」と語った。

次いで佐野助教と岩澤教授が、古代、中世、近代における即位の儀、大嘗祭の形式と意味の変遷について解説。最後に、現代の大嘗祭と政教分離について議論した。即位の儀を市民宗教の概念でとらえ、大嘗祭をパーソナルな宗教儀礼として分ければ問題はないとするパイ会長の意見に対し、岩澤教授も同意しながら、米国の大統領就任式などの例も市民宗教的儀礼とみられると指摘。芳村教主は、人間は宗教的生き物であるから、完全な分離は無理だとし、世俗化が進んでも人々の宗教的心情までなくしてしまうのは文化崩壊につながるとの意見を述べた。

マイケル・パイ会長

大正大学で第6回仏教教育学研究会

建学精神に基づく大学教育

3月23日、東京都豊島区の大正大学で日本仏教教育学会主催の第6回仏教教育学研究会が開催された。塩入法道会長（大正大学教授）の挨拶の後、小池孝範編集委員長（秋田大学准教授）より趣旨説明があり、「建学の理念と大学教育」のテーマで、塩入会長、山口弘江・駒澤大学准教授、田中潤一・大谷大学准教授による報告が行われた。

最初に塩入会長が大正大学での取り組みや展望などについて次のように述べた。

「大正大学は大正15年に天台宗、真言宗豊山派、浄土宗の3宗派連合体の大学（現在は4宗派）として設立された。澤柳政太郎初代学長が度々言及した『大乗仏教の精神』から大学の理念を一言で『智慧と慈悲の実践』としている。この理念をプレイクダウンして近年は『4つの人となる』慈悲、自灯明、中道、共生を教育ビジョンに掲げている。この教育ビジョンに基づき大学全体のディプロマポリシー（卒業認定・学位授与の方針）は、知識・技能の点では『自灯明』、思考・判断・表現の点では『中道』、関心・意欲・態度の面では『慈悲』と『共生』をあてはめている。かつては全学共通で必修で仏教を学ぶ授業があったが、現在は全学生が履修可能な選択科目を複数用意している（31年度）」

次に駒澤大学の山口准教授が駒澤大学の取り組みを報告した。

「駒澤大学は文禄元年（1592）に創設された『学林』に遡り、明治15年（1882）10月15日が開校記念日とされ、そこからの歴史が今の大学に直結し、僧侶養成機関から総合大学へと変化してきた。建学の理念は、大学法人駒澤大学『寄付行為』第三条の『仏の辞』を述べ、真宗大学は宗教に立脚した大学であり、そして真宗を中心として仏教学、哲学、他の人文諸学を同心円状に組み入れていくとしている。第3代学長の佐々木月樵は大正14年に『大谷大学樹立の精神』として、仏教の解放、仏教の普及、宗教的人格の陶冶を公にし、その時に出された3つのモットー、本務遂行、相互敬愛、人格純真が今でも大谷大学の建学の精神とされている。全学に及ぶ仏教教育の『人間学Ⅰ』（前期・後期）は1回生のクラス指定必修科目であり、建学の歴史、人権問題学習、釈尊の生涯、親鸞聖人の生涯を学んでいる。2回生の『人間学Ⅱ』は選択必修科目となっていて、また真宗大谷派が取り組んできた、非戦の系譜、アイヌ、ハンセン病なども『現代総合科目』の一つとして選択科目となっている」

笹田博道東北大学大学院教授のコメントの後、真剣な質疑応答と議論が行われた。

第6回仏教教育学研究会の全体討議、左から小池孝範准教授、笹田博道教授、塩入法道教授、田中潤一准教授、山口弘江准教授＝3月23日、東京都豊島区の大正大学

美術

「北斎漫画と富嶽三十六景」展

●熱海市・MOA美術館

4月19日より、静岡県熱海市のMOA美術館で「北斎漫画と富嶽三十六景」展が開かれる。同展では、多種多様な絵手本「北斎漫画」全15編が展示され、「富嶽三十六景」全46図が一挙に公開される。

葛飾北斎（1760―1849）は、90歳で没するまでの約70年間にわたり、狂歌絵本、読本、絵手本、錦絵、肉筆画など様々な分野で活躍した。その画業は、在世当時からヨーロッパに伝わり、特に「北斎漫画」は、ヨーロッパでジャポニスムが起こるきっかけになったといわれている。

天保2年（1831）頃より西村永寿堂から刊行された「富嶽三十六景」は、当時の富士信仰の盛行を背景に、斬新な構図や西洋から輸入された化学顔料ベロ藍による鮮やかな発色で人気を博した。

「富嶽三十六景」は、様々な気象、季節、視点などから富士を捉え、その異なる山容の表情を表現しようとしたもので、全46図からなる。全図が揃うコレクションは希少とされている。同展では、「凱風快晴」「神奈川沖浪裏」「山下白雨」をはじめ所蔵する「富嶽三十六景」全46図を展観でき、摺りの風合や細部の表現まで鑑賞できる。

「富嶽三十六景」の作品の中には、「北斎漫画」の人物ポーズや構図等を生かして描かれたと思われる箇所がいくつかみられる。「北斎漫画」の多種多様な図は、「富嶽三十六景」の中でより進化した形で表されている。

会期は4月19日（金）から5月21日（火）まで（休館日：木曜日、GW中は開催）問い合わせは同美術館・電話0557（84）2511。

富嶽三十六景全46図を公開

富嶽三十六景　凱風快晴

富嶽三十六景　東海道程ヶ谷